



Title	シェイクスピアと聖なる次元：材源からのアプローチ
Author(s)	齋藤, 衛
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42984
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	齋藤 さいとう まむる
博士の専攻分野の名称	博士 (言語文化学)
学位記番号	第 14887 号
学位授与年月日	平成 11 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	シェイクスピアと聖なる次元 —材源からのアプローチ—
論文審査委員	(主査) 教授 仙葉 豊 (副査) 教授 宮川 清司 教授 高岡 幸一 助教授 広瀬 雅弘

論文内容の要旨

本論文はシェイクスピアの劇における「聖なる次元」を考察したものである。シェイクスピアは本来的には世俗の劇作家であるが同時に聖なるものの次元が存在し、作品世界を照らし出していることを論証しようとしたものである。ここでいう聖性とはキリスト教的な現れかたをする場合もあるし、組織的な宗教以前の原始的なものの場合もある。そして、方法論としては材源との徹底的な比較研究から出発し、それを彼がどのように手を加えて独自のものにしていったか、実証的に論じられている。特定の作品を横糸に取り上げながら、全体を聖的なテーマとソース・スタディの縦糸で構成している意欲的な研究である。

論文の構成と内容

第 1 章では、長くシェイクスピア批評の中心に君臨してきたティリヤードの『シェイクスピアの歴史劇』(1945)が、80年代初頭から、米国の「新歴史主義」と英国の「文化唯物論」によって激しく挑戦されている、という最近の批評動向が説明される。ティリヤードの摂理と秩序の歴史観が、劇場の場所のもつ意味(マレイニー『舞台の場所』(1988)など)、シェイクスピアの民衆化(バーバー『シェイクスピアの祝祭喜劇』(1959)の影響下にある批評家たち)、そして、シェイクスピア史劇のマキアヴェリ化(ドリモア『ラディカルな悲劇』(1984)など)、という主に 3 つの観点から批判を受けている状況を分析している。神の摂理による歴史観と醜悪な現実を暴露するマキアヴェリ史観の間のせめぎあいを弁証法的に概観しつつ、歴史劇本論へのコンテキストを提示している。

第 2 章の「『リチャード二世』と巡礼」では、政争の故に国を追われるモープレー公爵という端役に焦点をあてている。国外追放という屈辱的な状況を、聖地奪回の十字軍に加わって神のために存分に働くことによって、自己の姿を権力者の側とは正反対の地平の「巡礼」という形で描いているとし、新鮮な視点から論じている。

第 3 章「『乱世』の復権」、第 4 章「『ジョン王』試論——スキュラとカリブディスの間——」、そして第 5 章「『ジョン王』試論——あの白い壁の岸辺——」の 3 つの章では、『ジョン王』の材源として知られる、『ジョン王の乱世』という作者不明の年代記劇とこのシェイクスピア劇との関係を綿密かつ詳細に論じている。第 3 章では、『乱世』がジョン王をプロテスタント殉教者に仕立てあげたプロパガンダ劇であるのに対して、『ジョン王』はより洗練されてはいる

が、『乱世』の背景をなしている強烈な反カトリシズムが脱落したために、ジョン王はヒーロー性を失いこの作品にはやや焦点がかける結果をもたらしたと論じている。

第4章では、ヴァージニア・カーとエマリス・ジョーンズという対照的な批評家の論点を整理しつつ、庶出のバスターードという人物に焦点をあて、彼のジョン王の宮廷を相対化する視点を指摘する。そして、『ジョン王』には、『乱世』とは違ったゆるやかな構造があり、一種の聖なる視点が出現するとしている。

第5章は『ジョン王』の後半部を主に扱い、前章で扱ったバスターードとともに、王子アーサーの抹殺を要求するジョン王の命令にさからってアーサーを庇護する牢番のヒューバートを中心に議論を展開している。英仏戦争にともなうイギリス宮廷内の対立を背景に國の運命を主題としているこの劇をナショナリズム的にとらえるよりむしろ宗教学者エリアーデのいう、聖なる「生まれた土地」の概念が重要であることを論証している。

第6章「『ヴェニスの商人』試論——ロレンゾー追跡——」では、ユダヤ人高利貸シャイロックの娘ジェシカと駆落ちするロレンゾーという人物のうちに、キリスト教徒とユダヤ教徒間の文化・宗教の対立と和解というテーマを読み込んでおり、また第7章「『不死鳥と山鳩』とシェイクスピア悲劇の精神」では『オセロー』につながる純愛の悲劇をさかのぼって論じている。

第8章「『オセロー』試論——デズデモーナを中心には——」では、オセロ自身の性格的欠陥を悲劇の原因とするものと、悪魔的なイヤゴーの誘惑を論ずるものが多い批評動向のなか、デズデモーナを議論の対象にしている。材源であるチンチオの小説と詳細な比較対象の結果、複雑かつ謎めいたこの女性の姿を浮き彫りにしている。

第9章「『リア王』とキリスト教」では、この劇の材源とされる作者不詳の『レア王』との比較によって、シェイクスピアの『リア王』が、『レア王』と比べて、非キリスト教的であるとする批評に反論しつつ、広くかつ深い意味でキリスト教的であることを論証している。

第10章「シェイクスピア批評の流行と不易——80年代を振り返る——」では、80年代以降の激しい批評動向の振幅を鳥瞰しつつ、各章の個々の議論の底流をなす大きな批評の流れを提示している。

論文審査の結果の要旨

斎藤氏の論文の特徴は、綿密なテクストの読みへのこだわりと、批評動向の現在への強い関心という二つのベクトルをバランスよく融合していることにある。セリフの一一行一句をおろそかにせず、さらにこの細部の読みから作品全体の構想にまで論を及ぼせ、出た結論をシェイクスピアという分厚い批評伝統に重ねていく。龐大なシェイクスピア研究においても、従来はあまり言及されることのなかった端役や周辺の人物に焦点をあてながら、それぞれの作品に新たな光を投げかけようとする氏の手法には、見るべきところが多い。そして、常にテキストという極小から出発し、時代精神という極大にまで論を広げていく姿勢には圧倒的なものがあるといえよう。この論文では、テクストの読みは材源との比較研究を中心に行われているが、従来の材源研究がシェイクスピアの引き立て役程度にすぎなかつたのに比して、材源そのものにも独自のものを認めその間の交渉を論じているのは新鮮なところである。「聖なるもの」についての定義がやや曖昧で広範囲にわたっているところはあるが、国家と個人の運命をゆるやかに攝理という概念で論じていることを考えると納得がいくと思われる。第1章と最終章にみられる先行研究の概括は各章の個性溢れる議論のコンテキストを与えるものとして役立っている。

以上の諸点から、本論文は従来の研究の水準を越える優れたものであり、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。